

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K14139

研究課題名（和文）社会的排斥の目撃者による被排斥者への援助行動 代理罪悪感の効果の検討

研究課題名（英文）Effect of vicarious guilt on the witnesses' helping behavior toward ostracized persons

研究代表者

津村 健太（Tsumura, Kenta）

帝京大学・理工学部・講師

研究者番号：10804396

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会的排斥の目撃者が罪悪感を抱くことで、被排斥者に対して援助行動を取るようになるのか、検討することを目的とした。

Web上で複数のシナリオ実験を実施した結果、社会的排斥場面を目撃した参加者の方が、罪悪感および恥を抱く程度が高かった。加えて、恥を感じると援助行動が抑制され、罪悪感を抱くと援助行動が促進される可能性が示唆された。

さらに本研究では、排斥の問題を考える上で重要な場面となる職場での排斥についても検討するため、Workplace Ostracism Scale日本語版を作成した。3件の質問紙調査の結果、WOS日本語版の妥当性を示すデータが得られたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

排斥は、心身の不適応や所属欲求への脅威をもたらす。そのため被排斥者は、再び人とのつながりを得る再親和を果たそうとする。しかし、被排斥者において無力感や抑うつが生じ、再親和への動機づけが失われてしまうなど、被排斥者自身で社会的つながりを得るのが困難である場合もある。そこで、排斥場面の目撃者による被排斥者への援助行動を可能にする要因を検討する必要がある。これまでの研究では、主に目撃者の個人差（共感性）に着目していた。本研究では、目撃者の共感性に依らず、罪悪感を抱かせる（あるいは恥を抑制する）ことで被排斥者への援助行動を促進できる可能性が示された点が、意義と言える。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to examine whether the feelings of guilt that witnesses of social exclusion experience lead them to take helping actions toward the ostracized.

Results of a web-based multiple scenario experiment showed that participants who witnessed a social ostracism scene had higher levels of guilt and shame. In addition, the results suggest that feelings of shame may inhibit helping behavior, while feelings of guilt may promote helping behavior.

In addition, the Japanese version of the Workplace Ostracism Scale was developed in this study to examine ostracism in workplace, which is an important situation when considering the issue of ostracism. 3 questionnaires were administered, and it is considered that the data obtained from the surveys show the validity of the Japanese version of the WOS.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会的排斥 目撃者 罪悪感 援助行動 仲間はずれ 無視

## 1. 研究開始当初の背景

人は進化の中で、生存や繁殖、資源の獲得など多くの面で他者に依拠してきた。社会的つながり無くしては生きていくことができず、人は社会的つながりに対して根源的な欲求を持つ。そのため、社会的つながりの欠如（社会的排斥）は心身の不適応等の問題を引き起こし (Williams, 2007)、また、被排斥後には新たな社会的つながりを得よう、すなわち再親和 (reconnection) を果たそうとする (e.g., Manar et al., 2007)。

しかし、排斥された状態が慢性化すると学習性無力感や抑うつが生じ、再親和への動機づけが失われてしまう (Williams, 2009) など、被排斥者自身で社会的つながりを得るのが困難である場合もある。そこで本研究では、排斥場面に直接関与しない第三者、具体的には排斥場面を目撃した人物による、被排斥者に対する援助行動（ソーシャルサポートや社会的つながりの提供等）を促すにはどのような条件が必要であるのか、検討する。

被排斥経験後には、再親和が重要であるが、上述のように被排斥者に着目した研究のみではこの問題を解決できるとはいえず、排斥場面を目撃者による被排斥者への援助行動を促進する要因を検討する必要がある。しかし、この点について十分に解明されていない。

そこで本研究では、排斥場面を目撃者の感情反応の中でも、行為者でもないにも関わらず生じる罪悪感に着目する。他者の望ましくない行為に対して、自身の行為ではないにも関わらず罪悪感を抱く。この罪悪感は、他者の侵害行為の阻止・中断に関して、自身の不作為を認知することでは生じる (Lickel et al., 2005)。先行研究では、他者の行為によってある人物に被害が及んだ際に罪悪感を抱いた者は、被害者に対して被害を補償するような向社会的行動を取ろうとすることが示唆されている (Lickel et al., 2005)。以上より、本研究課題の核心をなす学術的問いとして、自身が排斥行為に直接加担していなくとも、その場面を見て罪悪感を抱くと、被排斥者に対して被害を補償するような、ソーシャルサポートや社会的つながりの提供といった援助行動が生起するのか検討する。

しかし、他者による侵害行為を目撃した際には、恥が生じる場合がある。内集団に強いアイデンティティを持つと、他の成員の侵害行為によって自身の社会的アイデンティティが傷つくように感じられ、恥を経験する。その結果、自身のアイデンティティを守るために被害者やその出来事から遠ざかろうと動機づけられ、恥を感じた場合には被害者に対する援助行動が抑制される (Lickel et al., 2005)。学校や職場では、内集団に対して強い社会的アイデンティティを持つ成員も多く、目撃者による被排斥者への援助行動が生起しにくい背景にはこの恥が関わっているのではかと思える。そこで本研究では、被排斥者に対する目撃者による援助行動の抑制因として恥に着目し、恥が目撃者による援助行動に与える影響についても検討する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、社会的排斥場面を目撃者が代理罪悪感を抱くと被排斥者への援助行動が引き起こされるのか、検討することである。先述のように、被排斥者自身で再親和を得るのが困難な場合があるため、排斥場面を目撃した人物による被排斥者に対する援助行動をいかにして促すのか、検討する必要があるが、十分に検討されてこなかった。その少ない例としては、被排斥者に対する共感性についての研究が挙げられる。これらの研究では、目撃者が被排斥者を援助するには、目撃者の共感性の高さが条件となる可能性が示されている (e.g., Masten et al., 2011)。他方で代理罪悪感は、目撃者と行為主体の相互作用が密で、互いの行動や考え等に影響を及ぼすことのできるような関係である場合に生じやすいとされている (Lickel et al., 2005)。実社会において排斥が問題とされるような場面や集団 (e.g., 学校や職場) を考えてみると、上記の点から排斥を目撃した際に代理罪悪感を抱きやすいと予測される。また、Tsumura (2020) では、目撃者の共感性と代理罪悪感は、被排斥者への援助行動にそれぞれ個別に影響を与えている可能性が示唆された。このことから、共感性の高低に拠らず、代理罪悪感が喚起されることによって被排斥者への援助行動が促進されることが期待できる。

さらに本研究では、排斥の問題を考える上で重要な場面となる職場での排斥についても検討するため、職場における排斥について検討する際に広く用いられている Workplace Ostracism Scale (WOS) の日本語版を作成する。WOSは、職場において社会的排斥に該当する出来事をどのくらい経験しているか、尋ねる尺度である。多くの人が職場で何かしらの被排斥者を経験している、職務満足や離職意図、心身の健康などに与える影響も大きい (O'Reilly, Robinson, Berdahl, & Banki, 2014) など、職場における排斥は働く人にとって重大な問題となる。

また、自身が排斥されなくとも、職場内で誰かが排斥されているのを目撃することが、働く人に負の影響を及ぼすと考えられる。WOSの質問文を、職場で他の人が上記のような出来事を経験しているのを目撃したか尋ねるように変更することで、職場での社会的排斥の目撃経験を測定するのにも応用可能であると考えられる。

## 3. 研究の方法

社会的排斥の目撃者が罪悪感や恥を抱くのか、また、被排斥者へ援助行動を取ろうとするのか、

インターネットリサーチ会社を利用し複数のシナリオ実験を実施した（研究1から4）。

研究1: 参加者が友人たちと会話をしているところに、あとから別の友人がやってきて発言したが、無視され会話に参加できなかった（排斥目撃条件）、もしくは、あとから来た友人も会話に参加できた（受容目撃条件）、いずれかのシナリオを提示し、その場面に遭遇した際の感情を想像してもらった。

研究2: 研究1から、受容目撃条件のシナリオの一部を変更した。具体的には、あとから来た友人の発言への対応はあった（無視されなかった）が、会話には参加せずにそばで聞いていた、という結末へと変更した。（すなわち、会話には参加しなかった点はいずれの条件でも同じで、発言への応答が得られたか否かが異なっていた。）また、場面に遭遇した際の感情に加え、被排斥者への援助行動についても尋ねた。

研究3: 研究1では参加者自身も会話のメンバーであったが、研究3のシナリオでは、参加者は友人たちが会話している場面を第三者として目撃する、という内容に変更した。参加者が友人たちと会話をしているところを目撃するが、そこにあとからやってきた別の友人の発言が無視され会話にも参加できなかった（排斥目撃条件）、もしくは、あとから来た友人も会話に参加できた（受容目撃条件）、いずれかのシナリオを提示し、その場面に遭遇した際の感情、および被排斥者への援助行動について尋ねた。

研究4: 研究3から、受容目撃条件のシナリオの一部を変更した。具体的には、あとから来た友人の発言への対応はあった（無視されなかった）が、会話には参加せずにそばで聞いていた、という結末へと変更した。

続く研究では、職場における排斥について検討する際に広く用いられている Workplace Ostracism Scale (WOS) の日本語版を作成した。WOSは、職場において社会的排斥に該当する出来事をどのくらい経験しているか、尋ねる尺度である。WOSの質問文を、職場で他の人が上記のような出来事を経験しているのを目撃したか尋ねるように変更することで、職場での社会的排斥の目撃経験を測定するのにも応用可能であると考えられる。

研究5: WOSの原著者に許諾を得たうえで日本語版を作成し、3件の質問紙調査を通じてWOS日本語版の妥当性を検討した。質問紙調査ではWOS日本語版のほかに、印象操作、社会的陰謀、情緒的コミットメント、リーダー・メンバー・エクステンション (LMX)、抑うつ、対人的公正、役割内行動、自尊心、職務満足、対人的援助の規範認知に回答を求めた。

#### 4. 研究成果

研究1~4: いずれの実験においても、需要目撃条件の参加者よりも排斥目撃条件の参加者のほうが、罪悪感および恥を抱いたことが確認された（表1）。また、被排斥者への援助行動について尋ねた研究2では、排斥を目撃した際の罪悪感が援助行動を促進するのに対して、恥が援助行動を抑制する可能性が示唆された（図1）。研究3, 4でも、研究2と類似した傾向が見られた。これまで、排斥の目撃者が単なる傍観者となってしまう、被排斥者への援助行動が取られないことについて問題視されてきた。本研究では、目撃者の被排斥者への援助行動を促進する、あるいは阻害する要因についての初期の実験的証拠を提供したといえる。今後は、排斥目撃者における罪悪感を喚起する、あるいは恥を抑制する方法についての検討が期待される。

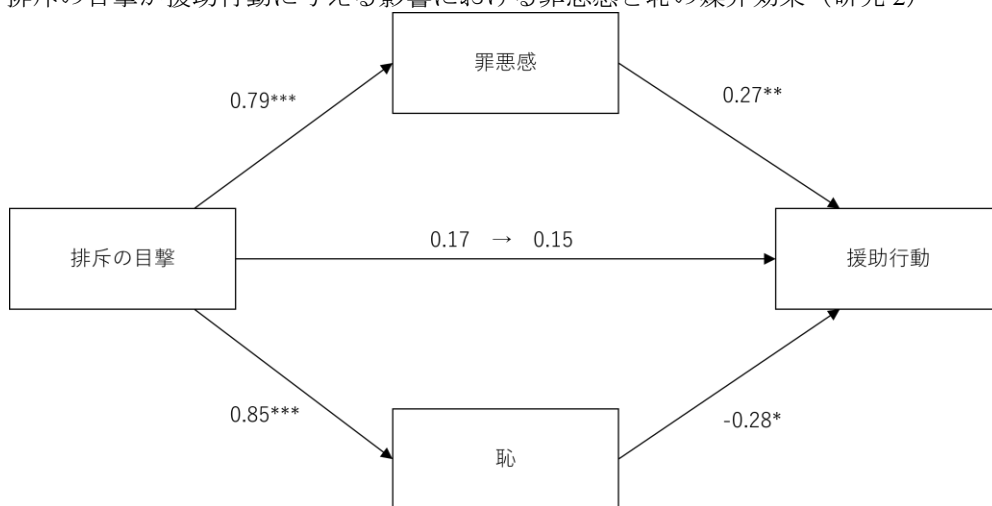
上記に加え、研究1では、先行研究 (Poon, Jiang, & Teng, 2020) と同様に、排斥場面を目撃すると自身が排斥される可能性を高く知覚するようになることも確認された。自身が排斥される可能性を高く知覚することが被排斥者への援助行動を阻害している可能性もあり、この点についても今後のさらなる検討が必要となる。

研究5では、3件の質問紙調査の結果、WOS日本語版 (WOS-J) についても原版と同じ因子構造であると示された。また、予測通り、WOS-Jは社会的陰謀、抑うつと正の相関、LMX、対人的公正、役割内行動、情緒的コミットメント、組織内コミットメントと負の相関を示した。年齢と印象操作とは有意な相関が見られなかった。しかし、WOS-Jと対人的援助の組織市民行動の規範認知および職務満足の間には有意な相関関係が見られず、予測と一致しない結果となった。今後は、WOS-Jを用いて、職場において排斥されること、および、職場で誰かが排斥されるのを目撃することが、働く人にどのような影響を及ぼすのか、検討を続ける。

表1. 排斥目撃条件および受容目撃条件における罪悪感と恥（研究2）

	受容目撃		排斥目撃		<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
罪悪感	2.63	0.94	3.45	0.86	< .001
恥	2.37	0.79	3.24	0.70	< .001

図 1. 排斥の目撃が援助行動に与える影響における罪悪感と恥の媒介効果 (研究 2)



注) 非標準化係数 \*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 津村健太	4. 巻 27
2. 論文標題 社会的排斥の目撃が自身の被排斥可能性の知覚に与える影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編	6. 最初と最後の頁 99-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 津村健太
2. 発表標題 社会的排斥の目撃は自身が排斥される可能性の知覚を高める
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------